
サヨナラのその日まで

百合茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サヨナラのその日まで

【Zコード】

Z6043E

【作者名】

百合茶

【あらすじ】

全力でいいところを見せたい俺はいつも空回り。

(前書き)

七夕小説企画「星に願いを」 参加作品です。「七夕小説企画」 または「星に願いを」で検索すると、他の作品も読めますよ。

「ナイスピッチング！」

乾いた音とともにボールはミットに収まっていた。
キャッチャーの立川悠の声を合図に、黄色い声が雨となつて突き刺さる。

「何やつてんだよ、俺。

痛いくらいの空振り三振に、俺は目を瞑つた。

この試合はただの紅白戦。だけど俺にとつては本番と同じだ。負ける訳にはいかない。それなのに……。

「こらあ、中西！スイングが遅れとるぞ！」

監督に怒鳴られながらボックスを去る。悠が、どんまいと声をかけた。でも、今の俺は落ち込んでいる所を見せてはいけない。

「あ、ヒロ！」

黄色い声の中から一際高い声が俺を呼ぶ。秋穂だ。そこに目を向けると、キラキラ笑いながら手招きしている。

「へへつ。三振しちまつた。まあ今のは春樹に……」

「春樹、すごかつたね。」

「へ？……あ、うん。あいつの速いよ。」

今の三振は、春樹に花を持たせてやつただけ。『次は打つから』そう言えたらどんなにカッコいいだろう。

「今日はありがとね。」

こんなカッコ悪い所を見せてしまつたけど、それでも秋穂にお礼を言わると嬉しい。単純に嬉しい。

「いいよ。だつて、地区大会は見に行けないつて言つからさ。それに観客がいた方がモチベーション上がるし。」

「まあ、俺が呼んだのは秋穂だけのはずなんだけど……。」

「私、野球の試合初めて見た。だから、ヒロには本当に感謝してるの。春樹、何も教えてくれないんだから。」

え？ 春樹が何だつて？

俺は思考が追いつけなくなつて、思わずマウンドに手を向けた。ちょうど2つ目のストライクを決めた春樹がそこにいた。ミットに収まつたボールを確認して、一度悠に頷いて返球を受け取る。一連の動きの中で、こちらを見る事なんて一切しない。応援も全く耳に入つていないようだ。

そういうえばアイツ、秋穂と同じクラスだつたな。クラスメイトにはあまり来て欲しくないなんて、いかにも春樹らしいじゃないか。もしかしたら春樹が素つ氣ないおかげで、俺の出番が回つてきたのかも知れない。

「まあ、野球見たいなら俺に言えよ。『コクトウ席取つておくから。』…おっしゃ！ 決まつた！ 男は力じやない、優しさだ。うん、今日から俺の美学にしよう。」

俺は爽やかに振り向いて秋穂を見た。

左寄りにちょこんと束ねた髪。束ねるには短すぎた右側の髪が、一房だけ垂れて顔のそばで揺れている。秋穂は俺をまじまじと見た後、クスッと笑つた。

「『コクトウ席？』

「へ？ あ、うん。交流戦でよく使う上之原球場。涼しくて、試合が間近で見えるところがあつてさ。その裏の丘っぽい所なんか、夜には星が…」

…つて、何言つてんだよ俺つ！

俺は急に恥ずかしくなつて…と、言つよりも、秋穂が単なる微笑みから爆笑の域に入つたので口をつぐんだ。

「ヒロ、コクトウ席じゃなくて、特等席だよ。」

「…んな事言つてない。」

「え？ 言つたよお。」

秋穂が肩を小突く。

へへつ、と笑うと、秋穂もまるでソーダの泡が弾けるように笑つた。

茜色の空を追い越して、朝まで突っ走つていきそつな、快活な笑いが秋穂らしい。秋穂はいつも秋穂らしく笑う。この笑顔が好きだ。声をたてて笑うところが好きだ。この声が好きだ。

「あはっ。ヒロ、照れてるう。」

「バー力。誰が照れつかよ。」

そしてまた笑う。本当によく笑う。秋穂の胸のすく笑い声を聞いていると、言い間違いがなんだ、三振がなんだ、と割り切れる。恰好よく見せなくても、秋穂は全て帳消ししてくれる。

まるで今朝の空のように、パツと気分が明るくなる。そうだ、今晩は星が綺麗にちがいない。そう思つと、上之原にどうしても行きたくなつた。

誘つて、みようか？

今なら言える、何となくそう思つた。

「なあ、」

告白でもないのに、手の平が湿る。秋穂の髪がスローモーションで揺れる。じちじらにゅつくりと視線が向けられ、流れのよひに空へ向かつていつた。

「あつ…」

白球がまるで夕日を追いかけるように、綺麗な放物線を描いて消えていく。2アウト、ランナーなし。そこに沢寺がホームランを放つていた。

すげえ。

感嘆がどよめきとなつてあちらーーちらからザワザワと聞こえてくる。ソロだ。いつも代打で入る沢寺がホームランだ。

すげえよ、ホームランだ。

そう言おうとしたその時、俺は気づいてしまつた。

切ない目、鞄の持ち手をキュッと握る細い手。不安そうに下唇を噛んでいる。

「なんだ。俺じゃなかつたんだ。」

喧騒の中、秋穂はただひとり春樹だけを見ていた。

さつきから独りで騒ぐ俺なんか、見ていなかつたんだ。

大会に行けない秋穂に紅白戦がある事を教えたことも、少しでもいい所を見せようといつた力み過ぎた事も、全部空回りしてたんだ。

秋穂は、春樹が試合している所が見られるからあんなに喜んで、春樹のプレーだけを見て、春樹だけを応援して…。

そう思つと胃の辺りがズンと重くなつて、上之原に秋穂を誘うなんどてもできやつになかつた。

* * *

今日の練習が終わり、マイテイングの後監督に一喝され、正門をくぐつたころには、すっかり日が落ちていた。

「空、すごいな。」

門の影から悠が現れ、隣を歩く。監督から解放されるまで待つていてくれたらしい。

「明日だ。」

そう言つて俺の肩をぽんとたたく悠の手は、秋穂のそれとは全く違う。まるで湿つたキャッチャーミットだ。

「明日うまくやればいい、なつ。」

何言つてんだよ、そう言つてやりたい。今日から明日へ日付が変わるもので、簡単に気持ちが切り替えられるか。

言葉にする代わりに、足元の空き缶を思い切り蹴り上げる。

カンシと頭を立てて宙に浮き、それは見事に道端のプランターに入つた。

「お、やるじやん。」

悠が関心する。

バー力。俺はサッカー小僧じゃないつつの。

ため息をつくと、悠が怪訝そうにこちらを見やる。そして思いついたように、交差点の前で立ち止まつた。

「ちょっと、遠回りして行かねえ？」

「何で？」

「めっちゃ、星が綺麗に見えるとこ、あるから。」

悠はさも、秘密の場所のように勿体ぶつているが、俺にはすぐに見当がついた。

* * *

さつきまでナイターで使用していたのか、上之原球場には白い光が灯つっていた。俺たち二人は、光に集まつてきた虫を追い払いながら、球場の裏へ向かつた。

悠は慣れた足取りで木の枝をよけ、丘にできた踏み固められた道を登つっていく。

本人は忘れているようだが、俺にこの場所を教えたのは悠だった。確か小学生の頃、3日3晩誘われてここに来た。だけど3日とも曇りで星が見えなくて、一人で来たのはそれっきりだった。

今日は見えるだろうか？いや、見えるに決まつて。だって、ここ最近は天気がいい。青空を仰ぐ度、一人でここに来るこことを思い描いていた。

本当なら秋穂と…

「あつ、流れ星」

「え？ ああ、うそつ！」

慌てて空を見上げた時にはもつ手遅れで、球場のライトに負けそうな光が幾つか見えるだけだった。

よく、田舎では星が綺麗に見えるという。それは、空気が澄んで

いたり、空を遮る建物なんかがないからだ。だけど、一番の理由は星と月よりも明るいものがないからだと思つ。

今日は駄目だな…

球場の白色光が目に痛い。夜空の光は、まるでスポットライトを浴び損ねた主役のようだ。

「悠、星見えないから帰ろうぜ。」

俺は星に願いを託すほど、ロマンチストじゃない。ただ、見たかつた。秋穂に見せたかった。そして、あの笑い声が聞きたかった。必死になつて手を伸ばしても、いつも俺は空回り。いつ、どのタイミングでバットを振ればいいかなんて、誰も教えちゃくれないんだ。

「ヒロ、あれが夏の大三角形。」

「は？」

悠が宙を指差す。そこにあるのは色褪せた空で、適当に散りばめた淡い光があるだけだ。

「織姫と彦星と、白鳥座のデネブを結んで…」

「あ、そう、デブね。」

「デネブ。」

まあ、どっちでもいいけど、三角関係の星座なんだな。織姫と彦星がいつか会うのを、俺は何もできずに見ているんだ。

春樹は、アイツは気付いているのだろうか。サインを確かめる、うなづく、ゆっくりモーションに入る。その一つ一つに秋穂は歓声をあげ、声を詰まらす。できれば気付かないでいて欲しい。俺だって、できるなら気付きたくなかった。だけど、好きという感情は、知る事を止めさせない。きっと俺は、後戻りできないほど知つてしまつ。気付いてしまう。それでも、そう簡単に諦めたくない。

彦星の元へ走りだした織り姫を、あの星は捕まえる事はできるのか…

「…ネデブ? だけ?」

そろそろ首が痛くなつてきたので、悠の方へ視線を移す。

「うーん…やつぱ難しいか。」

悠はそのまま、また宙を探り、北の空を指差した。

その瞬間、パツとライトが消え、慣れない闇に目が眩んだ。瞬きを繰り返していると、ぼんやりとした光が、次第にくつきりと浮かび上がる。夜風が抜ける。草影が揺れる。一瞬、息が止まった。

「北極星。分かりやすいだら。」

思わず頷く。そこには白い光が、呼吸するように揺りめこっていた。

「北極星、すごいんだぜ。」

悠が囁くように話しだす。

「一年中同じここにいるんだぜ。ずっとここにあるんだぜ。」

知つてゐるが、それくらい。

「なんか、明日、勝てるような気がするだろ？」

いつも、北極星はそこにある。

当たり前に知つてゐる事だけど、なんとなく、分かる気がする。

「明日の事なんか誰も知らないけど、明日も変わらないって言つて、何て言うかその…揺るぎないものつてやつ？」

「それ、いいな。」

揺るぎないものつて、何かいい。

秋穂が笑う。天を突き抜け、明日へと駆け抜け、俺を舞い上がらせる。明日も明後日も、きっと変わらない。秋穂が誰を好こうが、俺は声が聞きたい。話がしたい。笑顔が見たい。

恋も野球も空振りな俺を、天は見て見ぬ振りで、助けちゃくれない。だけど、9回裏に逆転するまで、ここで待つてくれる。

「俺、サヨナラするよ。」

夜氣を吸い込み、バッターボックスを思い浮かべる。9回裏、2死満塁。地面が揺らぐ。スタンドから熱氣が襲う。喧騒の中に一際高い声がきつと混じつて…

「さよならって、誰に？」

「バーカ。明日の試合だつつの。」

きつと打てる。

秋穂が試合を見にきた時には、きっと。

空振りも空回りもみんなみんなサヨナラだ。だって、俺にはまだ明日がある。この思いが変わらない以上、簡単には止められない。いつか放つアーチは、雲間をすり抜け夕日を超えて、北極星まで飛んでいく。

それまで待つてろよ、北極星。

心の中で言い放つ俺を、本調子の明るさを取り戻した空が優しく見守っていた。

（後書き）

空回りの恋を諦めてサヨナラするのではなく、ネガティブをぶつ飛ばして突き進んでやる。

青春ですね。

主人公ヒロには、ぜひ逆転サヨナラ（ホームランと恋の逆転）を見せてほしいものです。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6043e/>

サヨナラのその日まで

2010年10月8日15時28分発行